

総論

満点	100点	目標得点	80点	試験時間	60分	偏差値	法律:76 政治:75
大問数	4	小問数	50				
【解答形式】		選択式	50/50問	記述式	0/50問	論述式	0/50問
【問題難易度】		C	12/50問	B	16/50問	A	22/50問
※問題難易度：C難問、B可否を分ける問題、A正答すべき問題、を示す							

Topics

- 1：問題形式は変わらず、例年の通りマークシート方式の選択問題だけで、大問4問、全50問である。細かい知識問題が増え、難易度は昨年より高くなった。
- 2：昨年は前近代に比重があったが、今年は戦後史の問題が増加し、近代の比重が高くなった。また、経済史の問題は一題も出されず、政治史6割・文化史4割という比率になった。
- 3：2007年から毎年出されるようになった近現代の人物を一人取り上げた出題が今年も踏襲された。ただし、昨年は史料問題形式で難問だったが、今年は普通の文章題となりわかりやすくなった。

こんな力が求められる！

- ①基本的な用語から深い知識までの理解と暗記。すべて知識問題なので、教科書レベルの基本事項は絶対に落とせない。その上で、お茶ゼミで取り上げている細かい知識まで注意しておき、日常的に用語集も用いてなるべく知識量を増やしていこう。
- ②テーマ別に時代を超えた流れを理解する能力。大問はいずれも一つのテーマに従って出題されている。選択問題の個所だけを見るのではなく、全体の問題文の流れ、前後の文脈から考えると知らない知識でも選択肢から選べる時もある。
- ③幅広い分野の勉強。政治史を軸として勉強しながら、差が付く文化史の勉強を心がけておきたい。戦後史の比重が増えたことは盲点となったが、今後も出題頻度が増加すると思われる。なお、今年度は経済史や史料問題は出されなかったが、断続的に出されているので普段から史料に親しんで、苦手意識を克服しておきたい。

※参考図書

お茶の水ゼミナールテキスト・資料集。山川出版社『日本史B用語集』

【I】

予想配点 26/100 点	時間配分の目安 15/60 分
出題分野・テーマ 弥生時代から戦後までの住宅史	
出題形式 選択	
小問別解答と難易度 ※問題難易度：C難問、B合否を分ける問題、A正答すべき問題、を示す (1)(2) A (3)(4) C (5)(6) A (7)(8) B (9)(10) B (11)(12) B (13)(14) C (15)(16) B (17)(18) C (19)(20) B (21)(22) A (23)(24) A (25)(26) B	
お茶ゼミカリキュラム・テキストとの関連 ※高3履修分に限定 ハイレベル・総合：3月期①1・3回，夏期文化史4回，10月期4回，1月期1・3回 センター：夏期センターレベル文化史，10月期4回	

●本大問の特徴・概要

住居の歴史を弥生時代から、戦後までたどるリード文に穴埋め問題が付されている。ただし、穴埋めは、住居の問題はほとんどなく、各時代の文化史の雑題であるところに特徴があり、文化史の用語を基本から細かい事項まで押えておくことが対策になる。

このうち、学校やお茶ゼミでも扱わない細かい事項には用語集に慣れ親しんでみ見ておくことが必要だが、問題文と選択肢から判断して正答できるものもあるので、このような選択問題の解法も身につけておきたい。

ちなみに、問題の検討とは別にリード文の文章は、住宅史の流れをつかめるので、ぜひ熟読しておきたい。

●注目すべき小問

(3)(4) 藤原宗忠の 41(『中右記』)は院政初期の基本史料であり、当時の有職故実がよくわかるものだが、細かい事項。ただし、「右大臣の要職にあった」がヒントになる。

(9)(10) 江戸時代、町家に土蔵造が増えたことは細かいが、リード文から耐火建築ということがわかる。選択肢では、05(石)か43(土蔵)となり、石造りではないだろうということから判断できる。

(11)(12) 14(グラバー)は、「英貿易商」がヒントになって解答できる。

(21)(22) 27(司馬江漢)は、「洋風画家」がヒントになる。

【Ⅱ】

予想配点 24/100点	時間配分の目安 15/60分
出題分野・テーマ 江戸時代の政治史	
出題形式 選択	
小問別解答と難易度 ※問題難易度：C難問、B可否を分ける問題、A正答すべき問題、を示す (27)(28)A (29)(30)C (31)(32)A (33)(34)B (35)(36)C (37)(38)A (39)(40)A (41)(42)A (43)(44)B (45)(46)B (47)(48)B (49)(50)B	
お茶ゼミカリキュラム・テキストとの関連 ※高3履修分に限定 ハイレベル・総合：5月期4回，6月期1・3・4回，7月期1回，10月期1回，11月期4回， 12月期1回 センター：5月期1・2・4回，6月期2・3回，11月4回，12月1回	

●本大問の特徴・概要

①幕府の大名統制、②文治政治での大名統制の転換、③享保改革・寛政改革での武士統制についての選択問題。Aレベルは完答できる。Bレベルは若干応用力が必要。Cレベルは可否に関係ない。江戸時代の基本的な政治の流れをしっかりと把握しておきたい。

●注目すべき小問

(29)(30) 「前田利長」は、参勤交代が制度化される前に、はじめて江戸に参勤した人物。難問だが、お茶ゼミでは江戸時代の政治史で学習している。

(33)(34) 「忠孝」を穴埋めで答えさせる問題。史料対策もやっておく必要がある。

(35)(36) 「林述斎」は難問。松平定信の寛政改革で打ち出された寛政異学の禁は、56 林信敬に対する命令であったが、その後、問題文のように「林述斎」が「大学頭に任命」された。

(47)(48) 「岡田寒泉」・(49)(50)「古賀精里」は、寛政の三博士だが、慶應大学レベルでは岡田寒泉が代官になったことによって、古賀精里に変わったところまでの知識が必要である。

【Ⅲ】

予想配点 26/100点	時間配分の目安 15/60分
出題分野・テーマ 幕末から明治前期の政治史	
出題形式 選択	
小問別解答と難易度 ※問題難易度：C難問、B可否を分ける問題、A正答すべき問題、を示す (51)(52)B (53)(54)B (55)(56)A (57)(58)A (59)(60)C (61)(62)C (63)(64)A (65)(66)C (67)(68)B (69)(70)C (71)(72)A (73)(74)A (75)(76)A	
お茶ゼミカリキュラム・テキストとの関連 ※高3履修分に限定 ハイレベル・総合：7月期3回，夏期近現代史Ⅰ2回，12月期2・3回 センター：7月期1・2・3・4回，12月期2・3回	

●本大問の特徴・概要

伊藤博文の伝記から、幕末から明治前期の人物名・官職などを問う問題。2007年度から出題されるようになった形式。昨年は、桂太郎の伝記を史料から出していたがかなり難問だった。今年は普通の文章形式になり、伊藤博文であることも容易に判断できた。しかし、知識的には細かい問題も出された。

来年もこの形式が踏襲されるだろうから、近代の重要人物の関連事項に注意しておくことが必要である。

お茶ゼミでは、幕末政治史を詳しく学ぶので、A・Bレベルは得点できるレベルである。

●注目すべき小問

(51)(52) 20(御殿山)は、品川の御殿山に英公使館があったという知識からできる。

(61)(62)の18(宮内)・、(69)(70)の70(輪王寺宮能久親王)は、難問。できなくても可否には関係ないレベル。

【IV】

予想配点	24/100点	時間配分の目安	15/60分
出題分野・テーマ	律令国家から戦後までの行政・官僚制度史		
出題形式	選択		
小問別解答と難易度	※問題難易度：C難問、B合否を分ける問題、A正答すべき問題、を示す (77)(78)A (79)(80)A (81)(82)B (83)(84)A (85)(86)A (87)(88)B (89)(90)C (91)(92)A (93)(94)A (95)(96)A (97)(98)C (99)(100)C		
お茶ゼミカリキュラム・テキストとの関連	※高3履修分に限定 ハイレベル・総合：3月期①3回，夏期近現代史Ⅱ1・2回，9月期1・2・4回 センター：3月期①3回，9月期2・4回，10月期3・4回		

●本大問の特徴・概要

行政組織や、官僚制度の変遷を古代律令国家から、戦後史まで流れを追って選択させる問題。

ただし、穴埋め問題の中には、文化史の事項が含まれている。また、戦後史の出題がこの大問で5題あった。あと、問題Iに1題あり、戦後史の割合が増えた。

全体のテーマである官僚制度に関する問題は、近年の官僚制度批判という社会状況が背景になっていることや、設問の中に最近のトピック的な内容も含まれており、時事的な事にも関心をもって日本史の勉強をしているかが問われている。

●注目すべき小問

(89)(90) 40(杉原千畝)は、ナチス政権下のドイツから多くのユダヤ人を脱出させたことで知られている外交官で、日本のオスカー・シンドラールとも言われる。『シンドラールのリスト』が公開された後、テレビドラマやミュージカルでも上演された。このような最近のトピックにも目を向けておきたい。

(97)(98) 13(金融監督庁)は、1998年に設立されたが、2000年に現在の15(金融庁)に改組されたという難問。最近の金融危機などを背景とした出題。

(99)(100) 小渕恵三内閣の36(情報公開法)は難問。昨年度の慶應-法学部の戦後史は、戦後改革の時期までだったが、本年は55年体制以後まで出題された。今後のこのような傾向が継続すると思われるので、最近の内閣まで勉強することが必要であろう。